

2020年12月

瓢鮎抄（一四四） 尾池和夫

黙すれば神々のこゑ神無月  
意外なる山より冬の朝日かな  
行者橋まなかを通る冬鴉  
鎧球の玉の行方や冬の空  
白萩のこぼれて土の黒きこと  
通院の道や下弦の冬の月  
四阿に新聞を読む日向ぼこ  
琵琶湖疏水は北へ冬の虹低し

満潮にのりて流れ来る枯葉  
銀杏散る遺骨無名の土に散る  
ひと晩で冬枯となり大銀杏  
落葉搔く遺骨集めし土を踏み  
八時十五分の鐘や冬の雲  
平和の鐘鳴れば呼応の冬鴉  
冬の空見上げ不動や爆心地  
落葉焚く煙ゆつくり雲の中  
聖樹の裏に門松用意年の暮  
戦争のなき世続けよ去年今年

2020年11月

瓢鮎抄（一四三） 尾池和夫

二〇一九年中国

大草原入口に来て秋の雨  
放牧の斜面危うき草もみぢ  
大海のごと草原の草の花  
放牧の牛坐り込む秋時雨  
ホップ咲くそのままの名のビール花  
塩水湖へ流れ込む川秋深し  
早起きにあらざる鶏や冬に入る  
国営のポストは緑冬日さす

冬霧の長安街を二輦バス  
蜜柑らしき味を北京の百貨店  
暖房の効きすぎたるを何とせう

滑走路まだ穴だらけ冬浅し  
空港の周りは枯野また枯野  
冬枯れの滑走路にて待機中  
五番目と離陸待たされ冬の海  
眼下いま黄土の色の冬の海  
出入国検査のたびにマスク取り  
短日や旅にありしを今さらに

2020年10月

瓢鮎抄（一四二） 尾池和夫

千年の仏を拝み涼新た  
里芋の葉の裏返る残暑かな  
結束の光を放ち佞武多かな  
朝どりの出荷レタスは午前四時  
また台風むくりこくりの鬼来るぞ  
湧水へ長き石積み小鳥来る  
修善寺はけふも雨なり夜食とす  
寝姿は火山の根なり赤蜻蛉  
外輪山すつぼりつつむ芒かな

糸杉の間に確かむる星月夜  
早々に酔ひなかばなり酔芙蓉  
地芝居や押しも押されぬ身のこなし  
柿の木のない家はなし里の秋  
唐紙は江戸の絵柄よ温め酒  
里山をいくへにくぎり彼岸花  
少しづつ明の秋色深き嵯峨  
秋雨もまた佳きかなと渡月橋  
霧深きなかなる雨中嵐山碑

2020年9月

瓢鮎抄（一四一） 尾池和夫

伊豆半島ジオパーク

秋の夜ごと夜ごと松崎三番叟  
町ごとの三番叟ある秋祭  
なまこ壁の町の道なり星月夜  
宵闇に出で伊豆石の石畳

蒸し米の香る新酒の仕込蔵  
川に潮満ちまた曳きて鴨来る  
盆東風や風待港の下田にも  
川へ鱒群なして入る下田港

寝姿はかつての火道秋の山  
長九郎山よりの水稻の花  
川筋へ鳶高々と鎌はじめ  
足もとは碁石が浜や秋曇  
碁石の山なす岩場翳雲  
蛇糞石の名はとりあへず草の花  
七滝へ息をととのへ椎拾ふ  
椎の実を拾ひ案内に遅れけり  
秋潮の東に単成火山群  
波除稲荷神社の獅子に銀杏散る

2020年8月

瓢鮎抄（一四〇） 尾池和夫

構造線を線路横切り夏木立  
記録紙に遠雷を知る夜さりかな  
夏草や遺跡を地下にカフェテラス  
夕立や蕎麦の玉屋は中休み  
梅雨兆す深草柴田屋敷町  
木天蓼の白の揺れ見ゆ五月闇  
的矢湾も英虞湾もまだ朝曇  
黒南風や海拔零メートルの軒

もう十日休業なりと舟人海女  
海女の潜る荒磯けふも梅雨滂沱  
荒梅雨の雲に多島の数まざれ  
梅雨晴や蛸壺を積む登り窯  
雨垂のリズム乱るる三尺寝  
白南風や樹冠おしやべりするごとし  
片蔭や礎石の規律崩れをり  
一夜明け月下美人は膳にあり  
空蟬と蟬の離るる午前二時  
ひさびさの雨が蹴散らす蟬時雨

2020年7月

瓢鮎抄（一三九） 尾池和夫

エジソンの竹の筍どさと来る（再掲）  
里山の声が青田へひびきけり  
木苺や野帳の地図を頼りとし  
淀川の源流はどこ朴の花  
安曇川の鮎の丸ごと味噌汁に  
翡翠の急降下する高さかな  
沈む陽に黄金の雲や小判草  
夏来る鞆重たき月曜日

梅の木や芒種第三候の朝  
生体的胸騒ぎある夏未明  
抗体は持ちたきものよ半夏生  
吟行のそのほとんどを端居かな  
衣紋掛大袈裟にあり夏館  
蓮の葉の真ん真ん中や鳥の糞  
山荷葉の花透明にして夕立  
白鷺に選ばれし田となりけり  
潜在断層この下にあり田水沸く  
吉良の首洗ひし井戸や夏の雷

2020年6月

瓢鮎抄（一三八） 尾池和夫

残る鴨二羽二羽一羽二羽一羽  
麦青む畦をスーツの出勤す  
大粒の雪東京の春の雪  
パトカーの時速十キロ養花天  
春風やすべては読めぬ千字文  
京にてはこの防風の浜育ち  
青ぬたの主役の青にまづ箸を  
行者大蒜その歯応の記憶あり

雁足はごごみにあらず春の宵  
天ぷらのいちばん独活の芽を所望  
春の夜や締めはかき揚げ天茶にて

春深し御苑の松に避雷針  
エジソンの竹の筍どさと来る  
扇状地ふくらんでくる椎若葉  
天井川くぐる単線柿の花  
扇状地の田ごとの水や夏の雲  
初夏のあの峠越えれば手取川  
夏の星那由多の時を渡りくる

2020年5月

瓢鮎抄（一三七） 尾池和夫  
高知城一八句

蛇行する川ぬふやうに春の旅  
容赦なき春の日射しや土佐なれば  
土佐水木このあたり元御城内  
山菜を五感の味に春の宵  
春光や国宝天守と追手門  
自由民権運動の地や松の芯  
追手門へ曲り卒業証書去る  
お江戸より二百二十里城の春

天守閣かつてと同じ春の風  
春暑し歩幅の合はぬ城の段  
行く春や苔豊かなる野面積  
城垣の隙に蔦の芽はひ出しぬ  
石垣の石一つ抜け春の草  
八か月旅した佐川の桜  
宇宙より帰還の桜咲きにけり  
春落葉山内容堂屋敷跡  
ぞはぞはとももの芽囲む百度石  
ベンチ一つづつにひとりの春の昼  
桜散る不要不急にあらざれば

2020年4月

瓢鮎抄（一三六） 尾池和夫

大根の葉を巻き上げて象の鼻  
大和川断層越ゆる春の水  
枝ぶりの佳き白梅や通過駅

北へ行く春荒もろに湖西線  
風強き袖志（そでし）の棚田露の臺  
まさかこれほどとは知らず春の雪  
春がすみ浮き立つ讃岐富士の態（なり）  
春寒や日奈久断層目覚めたる

復興を花菜畑より南阿蘇  
湧水の流れを追うて芹を摘む  
本日のおすすめ一に木の芽和  
山椒の芽添へ一品の完成す  
思ひのほか闇深々と春の街  
予定表なきがごとくに春の風邪  
仏心を得て緋袴の卒業す  
出羽三山霞み盆地のありどころ  
人工雪ここに発祥雪間草  
行く春や昭和山色めきぬ

2020年3月

瓢鮎抄（一三五） 尾池和夫  
広島一八句

花崗岩むき出しのまま山眠る  
江田島や今は蜜柑の島なれば  
雪嶺のごとくに遠く冬の雲  
河豚の稚魚満ち潮にのり神殿へ  
短日や潮の満ち来る蟹の穴  
冬晴や鹿呼ぶ笛の甲高く  
誘はれて冬の鳥居へ手漕ぎ舟  
冬うらら市電の揺らぎ心地よく

平和の軸線沿ひたる冬の鳥の群  
平和公園とぎれなく雁の列  
鋳物師は香取雅彦冬の鐘  
国境無き世界地図ある鐘や冬  
冬晴や原爆ドーム百五年  
折鶴の再生紙にて冬便り  
原爆の子の像にゆれ冬の薔薇  
消えまほしと願ふ炎や冬の空  
被爆梧桐二世の落葉拾ひけり  
にんげんをへいわをかえせと冬の薔薇

2020年2月

瓢鮎抄（一三四） 尾池和夫

十二月八日や朝の鐘凍る  
初雪を払ひ銀座の真珠店  
年末やすまんすまんといふ御礼  
銀杏落葉散り敷くままに佛光寺  
秀吉のわらぢ屋号に鰻雑炊  
二次会の果てや祇園に冬の月  
辞世の句推敲重ね去年今年  
猪鍋や猪を射とめし武勇伝

くゑ鍋のくゑの出自を訊ねけり  
大声に蟹の息はく鍋奉行  
蟹歩きにて段降りる雪の朝  
北山の準平原や深雪晴  
酸茎漬天秤押しの鞍馬石  
冬日射し土間に積み置く茶蒸し籠  
大寒や現金輸送車右折する  
節分や風土記残けつ読み解いて  
節分の鹿にせんべい買ひにけり  
古墳発掘途中の斜面露の臺

2020年1月

瓢鮎抄（一三三） 尾池和夫

北京一八句

雲間より波立つ冬の日本海  
旧友の迎へ枯木の並木道  
冬鳥の群に北京の空の色  
キャンパスの樹に上弦の冬の月  
大学間連携祝ひ冬の月  
冷たしと妻は吾が手を確かめて  
冬銀河探すぞ暗き街なれば  
枯芝に足跡禁止なる掲示

枯蓮にかかる石橋叩きみる  
キャンパスの車庫に整備の消防車

おそろひの膝掛並べ自習室  
毛布たぐりよせて北京の二度寝かな  
いづこより人の湧き出す冬の朝  
乾杯を重ね重ねし冬の宴  
柳葉散る道のその奥地図を買ふ  
吐く息の凍りさうなり引き返す  
足下より冷え上りくる散歩かな  
赤い太陽冬の霞に沈みけり